

## 1. 診療科の特徴

地域の中核病院として小児科領域全般の診療に当たっている。なかでも常勤医の専門分野である血液疾患、悪性腫瘍、神経疾患、代謝・内分泌、感染症、アレルギー疾患、新生児が診療の中心である。2011年度の年間入院患者数は1326人、平均在院日数6.8日、1日平均外来患者数は85.8人であった。当院では幅広い小児科研修が可能であり、2年間で小児科専門医取得に必要な各分野の症例数を経験できる。

血液・腫瘍部門では急性リンパ性白血病をはじめとする悪性血液疾患や神経芽腫などの固形腫瘍の診断治療のほか骨髓移植推進財団の認定施設であり毎年数例の造血細胞移植を行っている。

神経部門ではてんかん、重症心身障害児を含む脳性麻痺、発達遅滞、脳の変性疾患や代謝疾患、自閉症、神経皮膚症候群など1000名の患者を診療している。

アレルギー部門は気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーが診療の中心である。気管支喘息はガイドラインに準拠した薬物治療のほか環境整備にも取り組んでいる。食物アレルギーには食物負荷試験の結果を重視

してなるべく除去食物が少なくなるよう心がけるなど、エビデンスに基づいた指導を行っている。

新生児部門は京都府新生児搬送システムの病的新生児受け入れ施設となっており、新生児搬送、母体搬送を積極的に受け入れている。最近では年間80-100例を受け入れている。病棟新設に伴い、平成25年度からNICUを開設し未熟児医療にもさらに力を入れていく予定である。

代謝・内分泌部門では先天性甲状腺機能低下症、成長ホルモン分泌不全性低身長症、糖尿病などのほか、小児悪性疾患の長期生存者の内分泌障害の診療にも当たっている。

循環器部門では川崎病後の冠動脈病変の経過追跡や軽症先天性心疾患などの経過観察を行っている。

小児救急に対しては24時間体制で対応しており、京都府内でトップクラスの受診数があり、重症患児の受け入れも積極的に行っている。

これらの専門外来のほか、乳児健診、発達、予防接種（海外渡航者向けを含む）の特殊外来を設けている。

## 2. 研修指導体制

### ●黒田 啓史（部長／小児科）

**専門領域** 血液・悪性腫瘍、造血細胞移植

**専門資格** 日本小児科学会専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本血液学会血液専門医、日本小児血液・がん学会暫定指導医

### ●松下 浩子（副部長）

**専門領域** 神経

**専門資格** 日本小児科学会専門医、日本小児神経学会専門医

### ●藤本 慎一郎（医長）

**専門領域** 腎臓、小児科一般

**専門資格** 日本小児科学会専門医、日本医師会認定産業医、AHA PALSプロバイダー、新生児蘇生法専門コースプロバイダー

### ●岡野 創造（部長／小児科神経）

**専門領域** 神経

**専門資格** 日本小児科学会専門医、日本小児神経学会専門医

### ●天谷 英理子（副部長）

**専門領域** 代謝・内分泌

**専門資格** 日本小児科学会専門医

### ●田村 真一（医長）

**専門領域** 血液・腫瘍・造血細胞移植

**専門資格** 日本小児科学会専門医、日本血液学会血液専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本小児血液・がん学会暫定指導医

## ●塩見 梢 (医長)

●専門領域 新生児・未熟児

●専門資格 日本小児科学会専門医、  
AHA PALSプロバイダー  
新生児蘇生法専門コースインストラクター

## ●佐々木真之 (医長)

●専門領域 救急医療

●専門資格 日本小児科学会専門医、  
AHA PALSインストラクター、  
JATECプロバイダー、  
JPTECプロバイダー

●玄 茉梨 (医員) ●専門領域 小児科一般

●中川 憲夫 (医員) ●専門領域 小児科一般

●河内 晋平 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●富田 晃正 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●金井創太郎 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●浦田 貴代 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●小林 幹 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●岡本 賢治 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●山本 由子 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

●村上 博昭 (専攻医) ●専門領域 小児科一般

## 3. 施設認定資格及び研修終了後に取得できる認定資格など

日本小児科学会 小児科専門医研修施設、小児科専門医  
研修支援施設、骨髄移植推進財団骨髄採取および非血縁移植認定施設、日本小児神経学会 小児神経専門医制度  
研修施設

## 4. 研修の一般的目標

病児の診療にあたってはこどもの心の有様を理解し、その上で症状の把握に努め診療計画を立てる必要がある。正常小児の成長・発達への理解が不可欠で、病児の代弁者である保護者（特に母親）の心理状態を理解し、疾患への対応だけではなく、育児不安・育児不満を受け止め保護者を支援する事ができる様にならない。検査に頼るのではなく、病児を診察した際の最初

の印象や判断を重視し全身状態の評価を行う事が大切である。小児疾患は発達段階により疾患内容が変化し、成人疾患と同一病名であっても病態が異なる事を理解し、各種疾病の病態生理とその治療的介入ができるとともに、成長と共に薬用量や補液量、更には検査正常値すら変化することを十分理解し応用できる様になる必要がある。

## 5. 具体的な研修到達目標

## ●研修到達目標

入院患者は月15名、年間180名程度を経験するよう配慮する。これにより小児科専門医の取得に必要な各分野の症例を幅広く経験できる。外来については、一般外来や救急外来はもちろんのこと、乳児健診や予防接種外来も習熟する。当院では保健所との連携もあり、保健所での健診業務も経験する。

## ●研修行動目標

小児に不安を与えないよう接し、コミュニケーションがとれるようになる。

保護者（母親）から診断に必要な情報などについての

確に聴取することができ、適切に病状を説明し、療養の指導ができる。

小児の発達・発育に応じた正常な所見と異常な所見、緊急に対処が必要かどうかを把握できる。

小児疾患の主症状及び救急の状態に対処できる能力を身につける。

必要な検査について、小児特有の検査結果を解釈できるようになる。

小児に用いる薬剤の知識と使用法、小児薬用量の計算法を身につける。

## 6. 診療実績、治験成績、疾患別症例数など

	2010年	2011年	2012年
入院患者数(人)	1,311	1,326	1,295
平均在院日数(日)	6.2	6.8	6.6
1日平均外来患者数(人)	91.7	85.8	80.2

治療成績として、造血細胞移植は過去5年間（2008年～2012年）で14例行っており全例生存している。

2012年度一般小児入院患者の疾患別症例数は呼吸器感染症426例、気管支喘息70例、感染性胃腸炎122例、けいれん性疾患139例、食物アレルギー（チャレンジテスト）82例、脳炎・脳症7例、髄膜炎10例、腎疾患18例、川崎病34例、血管性紫斑病12例、低身長9例、尿路感染症17例、腸重積4例、血液腫瘍3例、固形腫瘍3例、糖尿病4例、膠原病2例、ITP2例などで多岐にわたっている。

## 7. 週間予定

週間スケジュールの1例

	月	火	水	木	金
午前	採血当番	入院患者の診療	外来出番	入院患者の診療	入院患者の診療
	入院患者の診療		入院患者の診療		
午後	入院患者の診療	未熟児当番	予防接種	救急当番	乳児検診
	入退院カンファレンス	入院患者の診療	入院患者の診療	入院患者の診療	入院患者の診療
	抄読会			部長廻診	
	救急当番			病棟症例検討会	

## 8. 論文・学会活動

過去5年間の論文数は33編で学会発表は138演題を数えている。